



族長の秋

ガルシア＝マルケス

鼓直訳

集英社

族長の秋

鼓 直訳

EL OTONO DEL PATRIARCA

by Gabriel García Márquez

Copyright © 1975 by Gabriel García Márquez

Japanese translation rights arranged with
Agencia Literaria Carmen Balcells, Barcelona
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

1983年6月8日第1刷発行

編集 株式会社 綜合社

101 東京都千代田区神田神保町3-6-5

電話 03 (239) 3811

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

101 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 出版部 03 (238) 2842

販売部 03 (230) 6171

印刷所 中央精版印刷株式会社

目次

族長の秋

鼓直訳 3

解説

鼓直 233

現代ラテンアメリカ小説の歩み

249

著作年譜

261

族長の秋

主要登場人物

大統領

カリブ海沿岸の架空の小国に君臨している大統領。娼婦であつたベンディシオン・アルバラードの父無し子として生まれ、若くして軍隊に入ると、権謀術数を重ねて昇進をつづけ今日の座に着いた。

パトリシオ・アラゴネス 犬のごとき忠誠心をもつた大統領の影武者。

ロドリゴ・デ・アギラール將軍 大統領の終生の友。士官学校出の砲兵将校で国防大臣。親衛隊長と国家秘密警察長官をも兼ねている。

ベンディシオン・アルバラード 大統領の「生みの母」「おふくろ」。街道筋の娼婦だったが、いまは小鳥売りを生業にしている。

レティシア・ナサレーノ 大統領のただ一人の正妻。

ラウターロ・ムニョス將軍 詩人で学殖のあつた前独裁者（大統領）。

（領）。

ナルシート・ロベス將軍 男色の司令官。

ハシント・アルガラビーア將軍 生まれの賤しい上に悪賢い男。

サトゥルノ・サントス將軍 この馬の骨か分からない生粋のインディオ。

マヌエラ・サンチェス わが目を疑う美貌の女。貧民街に育つたこの「掃き溜めの鶴」に大統領は心奪われ求愛する。

ポニベント・バルボース將軍 国内でも最も大きな二つの守備隊の一つ、コンデ兵營に立てこもつて反乱を起こす。

デメトリオス・アルドウス現下 聖省の審問官で布教に熱心な高僧。

マウリシオ 二十八歳で無職、住所不定の脱走兵。ボンセ・デ・レオンの兄。

グマール・ボンセ・デ・レオン 二十三歳で工芸学校の陶芸の教師。

兄マウリシオとともにレティシア・ナサレーノ殺害の容疑で捕えられ監禁されている。

ホセ・イグナシオ・サエンス・デ・ラ・バッラ 三十二歳の若さで、七カ国語を操る才人。上流階級の末裔の一人。

週末に禿鷹^{はげたか}どもが大統領府のバルコニーに押しかけて、窓という窓の金網をくちばしで食いやぶり、内部に淀^{よど}んでいた空気を翼でひつ掻き回したおかげで、全市民は月曜日の朝、図体の大きな死びとと朽ち果てた栄耀^{えいよう}の腐臭を運ぶ、生暖かい、穏やかな風によって、何百年にもわたる情眠から目覚めた。このとき初めて、われわれは勇気を奮い起こしてそこへ押し入ったのだが、しかしそのためには、やたらと威勢のいい連中がけしかけたように、あちこち崩れかけた石積み^{いしづみ}の塀を破ることも、またほかの連中が提案したように、何頭もの牛を使って正門を引き倒す必要もなかった。何者かが軽く押しただけで、大統領府のいわば英雄時代には、ウィリアム・ダンピア^{（イギリスの航海者。一六五二—一七一五）}の臼砲^{きゅうはう}にもよく耐えた鉄の扉^{かど}の蝶番^{ちょうばん}があっさりはずれたのである。まるで、べつの時代に潜りこんだような感じだった。だっ広い権力の巢窟^{そうくつ}のがらくたの谷間に漂う空気が思ひ

のほか稀薄^{きぱく}だったからだ。静寂もはるかに由緒ありげで、これらの器具もしおたれた光のなかで辛うじて見えるという有様^{ようさま}だったからだ。とりつきの中庭に敷きつめられた石は、下から首をもたげる雑草の力にとくに屈していたけれど、そこでわれわれは、親衛隊が逃亡したあとの散らかりほうだいの詰所や、棚^{たな}に置き去りにされた銃器や、パンックで中断されたらしい日曜日の昼食の食いさしの皿が並んだ、大きな白木のテーブルなどを見た。役人どもの執務室が置かれていた薄暗いバラックや、彼らの不毛な日常よりもはるかに悠長な流れのなかにある、未決裁の書類の上に生えた色とりどりのキノコや、青白いユリなどを見た。中庭の真中あたりでは、五つの世代を超える人間が荒っぽい洗礼を受けた聖水盤を見た。そしてその奥では、車庫に成り下がった副王たちの厩舎^{きゅうしゃ}を見た。騒乱の時代に使われた二人乗りの箱馬車や、ベストを運んだ貨車や、彗星^{すいせい}出現の年に造られた山車^{だし}や、秩序ある進歩とやらを見送った霊柩^{きゆう}車や、初めて迎えた百年の平和のなかを夢中遊行するリムジンなどを、カメラの花と乱舞する蝶の群れの向こうに見た。それらはいずれも、うっすらと蜘蛛^{くも}の巣をかぶっていたが、しかしまだ使用可能な状態にあり、国旗の色で

きれいに塗り分けられてもいた。つぎの中庭の鉄柵の背後には、この大統領府が華やかだったところに茂みのかげでレブラ患者が惰眠を貪^{むさぼ}っていた場所だが、白っぽい塵^{ちり}を雪のようにかぶったバラの植込みがあった。放つたらかしにされたバラは茂りほうだい、芳香をあたりに漂わせていたけれど、ただそれには、庭園の奥から流れてくる異臭や、鶏舎の悪臭や、牛の糞^{ふん}のそれこそ胸の悪くなるような腐臭や、牛小屋に成り下がった植民地時代の会堂の、牛と兵隊たちの小便のむっとする臭いなどがまざっていた。息苦しいほどの藪^{やぶ}のなかを掻き分けながら進むと、愛妾たちのバラックが並んでいるアーチ形の回廊にカーネーションの鉢^{はち}が置かれ、アストロメリアやバンジーの植込みが目についた。打ち捨てられた家具什器^{じゅうき}やミシンの台数などから考えて、ここには、大勢の月足らずの子供を抱えた、優に千人を超える女が住んでいたことは確かだと思われた。台所のなかはまるで戦場のような乱雑さ、桶^{おけ}の洗濯物は日に晒^{さら}されてボロボロ、愛妾と兵隊たちがいであって使っているトイレの壺は開きっぱなしという調子だった。奥のほうに、よく馴染んだ土や樹液や小雨ごと、巨大な温室付きの船に載せて小アジアから運ばせた、シダレヤナギが見えていた。そし

てこのシダレヤナギの林の奥に、壊れたシャッターから相変わらず禿鷹^{どろお}が入り込んでいる、だだっ広くて陰気な大統領府が見えた。われわれの思い過ごしで、扉をこじ開ける必要はなかった。人間の声の力だけで充分だというように、正面の扉が自然に開いたのである。おかげでわれわれは、自然石が積まれた階段を踏んで、オペラハウスに敷いてもおかしくない絨緞^{じゅうたん}が牛どもの蹄^{ひづめ}でめっちゃめっちゃになっている、二階へ上がることができた。入口のホールから寢室のあたりまで、執務室や公的な行事のための広間が続いていたが、それらはいずれも荒れきっていた。牛が図々しくうろつき回って、ビロードのカーテンを貪り、肘掛椅子のサテンを噛^かみちぎっていたのである。壊れた家具や真新しい牛の糞が散らかった床の上に、聖者や將軍たちの威風あたりを払う肖像が投げだされているのが見えた。牛たちによって食い荒らされた食堂や、その糞で穢^{けが}された音楽室や、おなじく牛たちによって壊されたドミノ用のテーブルや、牧場の草のように噛みちぎられたビリヤードの台なども見られた。そして片すみには、風洞が打ち捨てられていた。それは、大統領府の内部に住む者たちが今は消えた海への郷愁に屈しないように、羅針盤^{らしんばん}上のあらゆる現象をでっち

上げるためのものだった。到るところに鳥籠^{とりかご}が吊り下げられ、前の週のある晩にかぶせられた睡眠用の布がそのままになっているのが見られた。そして無数の窓を透かして、明けそめた記念すべき月曜日にまだ気づいていない、眠れる巨獣のような首都が見えた。その首都のはるか彼方、地平線のあたりまで、かつて海があったところまで、粗い灰で埋まった死の火口のような涯^{はて}しない平原が広がっているのが見えた。ごく少数の寵臣^{ちゆうしん}だけが近づくことを許された、この聖域に立つて初めて、われわれは禿鷹^{どらぎ}の餌食^{えじき}の放つ悪臭に気づいた。彼らの持病である喘息^{ぜんそく}や予知能力を感じた。彼らの羽ばたきで舞い上がる腐臭に導かれて、われわれは謁見^{てっけん}の間にたどり着き、蛆^{うじ}のたかった牛の骨に出くわした。牝^めの家畜の大きな尻が等身大の鏡のなかで反射を繰り返しているのを見た。われわれはそれを眺めながら、壁の奥に隠された秘密の執務室に通じる、横手のドアを押した。そしてそこに彼を見出した。階級章も何もついていない麻の軍服、長靴、左の踵^{かかと}にだけ残っている金の拍車。陸と海のあらゆる人間、あらゆる動物よりも、彼は年老いて見えた。床にうつ伏せになっており、枕がわりに右腕を頭の下にあてがっていた。孤独な独裁者としての長い長い一生の

あいだ、毎晩、その格好で眠ってきたのだ。顔をよく見るためにその体を引っくり返したとき、われわれは、たとえ禿鷹に食い荒らされていなくても、彼を確認するのは不可能だということに気づいた。実際に彼の顔を拝^{たま}んだ者は、一人もいなかったのである。彼の横顔はさまざまな貨幣の裏表や、郵便切手や、浄血剤のラベルや、脱腸帯や、スカブラリオなどに印刷されていた。また、胸に国旗と国章のドラゴンをあしらった彼の石版刷りの肖像は、四六時中、到るところに掲げられていた。しかしわれわれは、それが彗星^{きうせい}出現の年にすでに似ても似つかぬものと見なされていた肖像のコピーの、そのまたコピーであることを知っていた。当時のわれわれの親でさえ、その親の口から話を聞いて——この連中もまたその親から聞いて——それで、彼がどんな人間なのかを知っていたに過ぎない。われわれは幼いころから、大統領府には彼が住んでいると信じていた。パーティーの夜に明りがともされるのを見た者がいたからである。大統領専用車のミサの飾付けを透かして、憂鬱^{うつ}そうな目付きや、土気色の唇や、もの思わしげに誰にともなく振る手などを見たという話をする者がいたからである。また、ずいぶん昔のことだがある日曜日、街頭に立つ

て、もはや忘れられた詩人ルベン・ダリーオ（ニカラグアの詩人。一八六

七、九一六）の詩を五センチポのはした金で吟じてみせる盲人が、何者かによってさらわれるという事件があったけれど、彼は大統領ひとりのために朗誦ろうしやうを行ない、その報酬として与えられた大枚の金貨をふところに、意気揚々と戻ってきたからである。もともと、盲人は大統領の姿を拝むことはできなかった。目が不自由なためではない。かつて黄熱病が流行したとき以来、大統領をその目で見た者はいなかったのだ。それにもかかわらず、大統領がそこにいることをわれわれは疑わなかった。依然として世界は存在し、人間の営みは変わらず、郵便物は無事に届いたからである。市役所のプラスチックバンドが土曜日ごとに、砂をかぶった椰子やしの茂みやアルマス広場の陰気な街燈の下で、間延びのしたワルツを吹奏し、そのメンバーが死ねば、べつの年輩の男が取って替わったからである。この数年、大統領府の内部で人間の立てる物音や小鳥の囀りささずが聞こえたことはなく、鉄の扉は堅く閉ざされていた。にもかかわらず、みんなが内部に誰かが住んでいることを疑わなかったのは、夜になると海に向いた窓のガラス越しに、巨船のものかと思うほどの灯がとるのを見たからだだった。釣られてそこに近づ

いた者の耳に、賑やかな巨獣の蹄の音や吐息などが堅固な壁越しに聞こえたからだだった。一月のある日の午後にはわれわれも、大統領府のバルコニーから暮れなずむ空を眺めている一頭の牛を見かけた。大統領府のバルコニーに牛。こんな不似合いなものがあるかね！ まったく情けない国があつたものだ！ 牛がどうやってバルコニーに上がったのか、この点についていろいろと憶測がなされた。よく知られているとおり、牛は階段を昇るようなことは決してしないものだ。石の階段ならばなおさらだし、絨緞が敷かれていればなおなおのことである。われわれも結局、現実

に牛を見たのか、それとも、たまたま日暮れどきのアルマス広場をぶらぶら歩いていて、大統領府のバルコニーに立っている牛の夢をみたのか、分からずじまいだった。当然のことながら、その後の長い年月、バルコニーに何かが見えたという話はなかったのだが、ついに先週の金曜日、いつも居眠っている施療院の軒先から舞い上がった禿鷹の最初の群れが、そこに飛来したのである。群れは奥地からもやって来た。昔は本物だった砂の海の水平線から、波のごとく押し寄せた。そしてまる一日、ゆっくりと輪を描きながら大統領府の屋根の上を舞っていたが、やがて、花嫁のよ

うな美しい羽毛と真紅の頸飾^{くびかざり}が目立つ、首領とおぼしき一羽の禿鷹が無言の命令が下された。こうして、あのガラスを割る狼藉^{ろうぞく}や、あの図体のかい死体から発する腐臭や、あの禿鷹の群れの窓からの出入りが始まったのである。こんな事態はそこらの並みの家でしか起こりえないことである。それでわれわれも、大統領府に押し入る気になったわけだ。無人の聖域に踏み入ったわれわれの目に映ったのは、無残にも潰えた栄華の跡だった。鳥についてはまれた死体であり、骨だけの薬指に権力の象徴である指環が残った、生娘のようになめらかな手だった。小さな苔や海の寄生虫が全身にびっしり張りつき、とくに腋^{わき}の下や鼠蹊部^{そけいぶ}がひどかった。睾丸^{こうがん}のヘルニアをズックの脱腸帯で押えていたが、牡牛^{おうちう}の腎臓^{じんぞう}ほどの大きさがあるにもかかわらず、禿鷹もこれには手を付けていなかった。しかしこの時になっても、われわれは素直に彼の死を信じられなかった。というのは、遠い昔のことだが、鉢を用いる巫女^{みこ}たちの水占いによって予言されたとおり、彼が執務室でただ一人、服を着たまま、眠っている最中に大往生とも言えるものを遂げたのを見るのは、じつは、これで二度めだったのである。そのいわば秋の始まりだったが、彼がおなじ状態で見つかった一度め

のころは、国民大衆にもまだまだ活力があつて、寢室の奥に潜んでいるときでさえ、大統領は死の脅迫をまざまざと感じたものだった。しかし、それでも彼は、不死の運命を授かっているかのように国政を執^とりつづけた。当時のここは、大統領府というより、むしろ市場だった。人びとは、回廊で驢馬^{ろば}の背中から野菜や鳥籠^{とりかご}を下ろしている、裸足の使用人たちを掻き分けて歩かねばならなかった。お上の慈悲という奇跡を期待しながら、階段の下で丸くなって眠っていたけれども、腹を空かせた名付け子を連れた女たちの上を、それこそ飛び越えていかねばならなかった。花瓶のなかで一夜を過ごした花を新しいものと取り替へたり、床を磨いたり、バルコニーで絨緞^{じゅうとん}をはたく枯枝の拍子に合せてはかない恋の歌などをうたったりしている、口の悪い愛妾^{あいせつ}たちが投げ捨てる汚水を、器用に避けていかねばならなかった。それだけではない。雌鶏^{めんけい}がデスクの引出しのなかに卵を産んでいるのを見つけて、一生を保証された小役人どもが大騒ぎをし、淫売と兵隊たちがトイレのなかで用事を済ませ、小鳥たちが鳴きくるい、野良犬どもが謁見の間でいがみ合いをおっぱじめるといふ有様だった。いったい誰が誰なのか、さっぱり見分けがつかなかった。扉が開

きつばなしのこの館が何様のものなのか、それさえ定かではなかった。この途方もない混乱のなかでは、政府の中枢がどこに存在するのか、それを突き止めることは不可能だと思われた。そして大統領府の主は、この市の凄まじい騒ぎに自分も加わるばかりでなく、むしろそれを煽りたて、思いどおりに操っていた。その寝室に灯がともったかと思うと、一番鶏の鳴く声よりも早く、親衛隊の起床ラッパがほど遠からぬコンデ兵営に新しい一日の始まりを告げた。そしてこのコンデ兵営はサン・ヘロニモ基地のために、このサン・ヘロニモ基地は港の守備隊のために、あの起床ラッパを伝えた。守備隊の起床ラッパは続けざまに六度も繰り返され、まず首都の全市民を、ついで全国民をたたき起こしたが、この間大統領は、つい最近始まった耳鳴りを両手で懸命に押えこみながら、携帯用の便器の上にしゃがんで瞑想に耽っていた。また、あの栄華を誇った時代にはまだ窓の向こうに存在していた、トパーズ色の荒海を進んでいく船の燈火を眺めていた。大統領府の主となつてからというものの、彼は毎朝、牛小屋の乳搾りに立ち合つた。大統領府の三台の車で市中の兵営に送られるミルクの量を、手ずから計つた。そしてそのあと台所で、タビオカを焼いたパ

ンといっしょにブラックコーヒー一杯を飲んだが、いつも使用人たちのおしやべりに耳を奪われて、新しい一日の気紛れな風に吹き流されていくその先は、およそ気にしなかつた。おなじ言葉で話せるのはこの使用人たちだけで、彼らのしかつめな世辞を大いに喜んだが、その下心はちゃんと読んでいた。九時少し前になると、専用の中庭のアーモンドの木の下にしつらえさせた花崗岩の浴槽で、薬草を煎じた湯にゆっくり浸かり、十一時を過ぎてやっと、明け方から続いていた不安が消え、移り気な現実の成り行きに直面する勇氣を得た。遠い昔のことだが海兵隊の駐留中は、祖国の命運を決するべく上陸部隊の司令官とともに執務室にこもり、拇印で——當時は読み書きができなかつたので——あらゆる種類の法令や命令書にサインした。しかし、ふたたび国家とその権力を一手に委ねられると、法律文書などという厄介なものに煩わされることはなかつた。二六時中、あらゆる場所に姿を現わして、自分で万事を取りしきつた。その態度は石のように素気なかつたが、同時に、彼の年齢では考えられないほどまめまめしいものでもあつた。その手で病氣を癒してもらおうとする大勢のレブラ患者や、盲人や、中氣病みがよく彼を襲つた。また、地震、

日蝕、閏年^{うるふとし}その他の神の手違いを矯^ためなおす者、などと持ち上げる学識^{がくしき}ゆたかな政治家や、厚かましい阿諛^{あしよ}追従^{しゅうじゅう}のやからがつねに彼を取り巻いていた。しかし彼は、雪の上に残った象の足跡^{あしあと}めいた大足を引きずりながら、こまめに大統領府のなかを歩き回って、公私の問題をてきぱきと片づけていった。その簡単なこと、ここのドアを取り払って、あそこに取りつけろ、と命じながら、それが取り払われたとたんに、元へ戻せと言って、また取り付けさせるのと少しも変わらなかった。塔の上の時計に、十二時を十二時に打つのをやめさせて、二時に打たせるようにしろ、一生がもっと長いものに感じられるはずだ、というその一言で、一瞬のためらいもなく、一秒の間もおかず、それが果たされるのと少しも変わらなかった。もっとも、物みな死に絶えたような午睡の時間だけはべつだった。この時刻になると大統領は、愛妾^{あいせつ}たちのいる薄暗い部屋に引き退って、いきなりその一人を選び、互いに服も脱がず、ドアを開けっ放しにしたまま事を始めた。それが始まると大統領府の内部いっぱい、にわか亭主の荒々しい喘ぎや、金の拍車の切なげな音や、犬めいた低い呻^{うめ}きや、女の素っ頓狂^{すくどんきやう}な声などが響き渡った。女はゆっくり楽しむどころか、必死で、

目だけが光る瘦^やせた子供たちを追い払おうとした。ここにいちや駄目、向こうの中庭で遊びなさい、子供の見るものじゃないわ！　まるで天使がこの国の空を渡っていくかのような、それは時刻だった。人声は消え、日々の営みは止まった。人びとは唇に人差し指をあてたまま石と化した。息を詰めて、物音ひとつ立てなかった。將軍がお楽しみのも最中だ！　しかし、彼のことをよく知っている連中は、この神聖な休息の時間にも気をゆるめなかった。平生から彼は、分身の術を心得ていると信じられていたからだ。夜の七時にドミノを楽しんでいたかと思うと、おなじ時間に、謁見の間で牛の糞に火をつけ、蚊を追ひ払おうとしている姿が見られたのである。みんなが生きる夢に胸をふくらませるのは、最後の窓の灯が消えて、大統領の寢室のドアの三個の掛け金、三個の錠前、三個の差し金^{さしきん}がさし込まれた大きな音を聞いたあとだった。やがて、疲れきった体を石の床に投げだす音と、子供に帰った老人の寢息が聞こえる。寢息は潮の満ちるにつれて深くなっていった。夜風の奏でるハーブの音が、その鼓膜の奥に巢^{すく}喰^くった蟬^{せみ}を沈黙させた。逆巻く大波が、副王や海賊たちの存在で名を挙げた古都の街々へ押し寄せて、窓という窓から大統領府の内部になだ

れ込んだ。凄まじい話だけれど、ある八月の土曜日には、エボシ貝が鏡にびっしり張りつき、鯨が狂ったように謁見の間を泳ぎ回った。海面は、先史時代の大海原のもっとも高かった水準を越えて、地球の表面から、空間と時間からあふれた。ただ大統領だけが、兵卒の麻の軍服や長靴、金の拍車などをつけ、枕がわりに右手を頭の下にあてがうという格好で、孤独な溺死者の夢で満ちみちた青白い水の上を、うつ伏せになって漂っていた。その最初の頓死に先だつ波瀾の多かった年月、あらゆる場所に同時に姿を現わしえたこと。落ち目かと思うと、すぐまた運が上向くこと。不首尾な恋に悩みながら海中で法悦を味わっていたこと。これらすべては、お取巻きが礼讃していたような、天賦の才能によるものでは決してなかった。また、批判者たちが主張していたような、集団的幻覚でもなかった。もっぱら、この上ない影武者であるパトリシオ・アラゴネスの申し分のないご奉公、犬のごとき忠誠心があつたという幸運によるものだった。ところで、この影武者はとくに探して見つけてきたものではなかった。あるとき、妙な報告が彼のものにもたらされたのだ。閣下、にせの大統領専用車がインディオの村々を回って、しこたま稼いでいるという話です、

にせ者は、葬式の晩みにたいに陰気な目付きと、土気色の唇をしているそうですが、手だけは花嫁のようにきれいで、サテンの手袋をはめた手で塩をつまんで、通りにひざまずいた病人たちの頭の上から振りかける、車の後ろには、これもにせ者の、馬に乗った二人の将校がついていて、治療代の名目で金貨を巻き上げるのだそうです、閣下、ひどい話じゃありませんか！ しかし当の閣下は、問題のべてん師を厳罰に処するよう命令を下すことはしなかった。それどころか、紛れを避けるために頭にすっぽり袋をかぶせて、内密に大統領府に運びこませた。運びこませたのはいが、おかげで彼は、そっくりさんと対面するという、たいへんな屈辱を味わうはめになった。なんだ、これは、わしじゃないか！ 思わずそう叫んだが、それも道理、ほんとに瓜ふたつだった。ただし、いかめしい声はべつで、これだけは、もう一人の男もまねることができなかった。また、生命線が親指の付け根までまっすぐ伸びている、はっきりにした手相もべつだった。大統領はその場で男を銃殺に処することはしなかった。しかしそれは、男を公認の替え玉として飼っておいたほうが得だと考えたからではない。そう思いはじめたのはかなり時がたってからで、ほんとう

の理由はほかでもない、己れの運命を暗示するものがべてん師の手のひらに刻まれてはいはないかという、妙な考えに取り憑かれたことだった。これが無意味な妄想だと気づいたところには、すでにパトリシオ・アラゴネスは、六度目の暗殺に遭いながらしぶとく生き延びていた。大槌を喰らって潰れた足を引きずって歩く癖がつき、猛烈な耳鳴りに悩まされ、真冬の明け方にはヘルニアに苦しむようになっていた。ええい、せっかくフランダースの鍛冶屋に注文して作らせたのに、この尾錠め、糞の役にも立たん！ 革紐がからんでうまくいかない振りを装い、ぶつぶつ文句を言いながら、金の拍車をつけたりはずしたりすることも覚えた。狙いは、ただ、謁見の時間をできるだけ短くすることだった。さらに彼は、父親のガラス工場で瓶を吹いていたところは、じつにおしゃべりで冗談好きだったにもかかわらず、分別臭くて陰気な男に一変した。相手の話はろくに聞かず、その暗い目の底をじつと覗くだけで肚のなかを見抜いた。そっちの意見はどうかね、とまず相手に訊いてからでなければ、絶対に質問に答えなかった。奇跡を売って歩くのを仕事にしていたところはひどい怠け者で、他人にたかってばかりいたのに、ひとに煩さがられるほど小まめに

なり、やたらとそこをうろつき回った。狡猾で貪欲な男に変わった。女の不意を襲ったり、服を着たまま、枕もなしでうつ伏せになって寝る生活にも馴染んだ。若いころの自尊心をきっぱり捨て、鮮やかな手つきでガラス瓶を吹いて作るだけのことだけれど、父親ゆずりの天職も完全に諦めた。政敵の土地に赴いて、二つめの石が積まれるはずのない場所に最初の石を据えたり、落成式のテープを切ったりという、権力者につきまとう恐ろしい危険にも勇敢に立ち向かった。しよせん、高嶺の花という想いに苦しめられて夜もろくに眠れず、力なく溜息をつくことが多かったが、手が触れないように気を遣いながら、移ろいやすい美を誇る大勢の女王たちに優勝の王冠を授けた。つまり彼は、自分のものではない他人の運命を生きているという、ばつとしない境遇に喜んで甘んじたのだった。ただし、それは欲得ずくでもなければ、確固たる信念によるものでもなかった。月額五十ペソという名目的な俸給と引き替えに、また、現実にはそうだという不便を伴わない王侯暮らしの特典と引き替えに身を売って、公式の影武者という終身職——こんなうまい話があるかね！——に就いたからに過ぎなかった。誰が誰やら分からぬこの紛らわしさは、大風の吹き荒れた

ある夜、その極に達した。大統領がたまたま見かけたパトリシオ・アラゴネスが、ジャスミンの芳しい香りの漂うなかで、海を眺めながら溜息をついていたのである。当然のことながら大統領は驚いて、足許がふらふらしているようだが、食い物にトリカブトの毒が入っていたのじゃないか、それとも、悪い風にあたったのか、と尋ねた。するとパトリシオ・アラゴネスは答えて言った、いいえ、閣下、もっと厄介なことです、土曜日のことですが、カーニバルで選ばれたミスに王冠を授けたあとで、彼女と最初のワルツを踊りました、じつは、この記憶が頭にこびりついて、忘れようにも忘れられないのです、わたしには手の届かない、あれこそ絶世の美女でした、閣下、あなたにもお見せしたいくらいです。それを聞いて大統領は安堵の吐息をつきながら言った、なんだ、そんなことか、女に惚れた男によくあることだ。大勢の美しい女を愛妾にするとき使った手だが、そのミスを誘拐しろと大統領はすすめた、四人ほど兵隊をやって、女を力ずくでお前のベッドに連れこませよう、連中が手足を押えているあいだに、そのでっかいスプーンで、手早く、あそこを掻き回してやれ、無理やり手籠めにしてしまえ。さらに大統領は言った、どんなに堅い女でも、

じたばたするのは初めだけだ、そのうち女のほうから、閣下、やめちゃいや、これじゃまるで、実のはじけた蒲桃だわ、なんて言うに決まっとる。しかし、パトリシオ・アラゴネスの望みはそんなことではなかった。もっともっと大きなもの、相手からも愛されたいということだった。閣下、彼女は素姓の正しい女ですよ、閣下だってひと目見れば、びんと来るでしょう。そう打ち明けられた大統領は、少しは気が紛れるだろうというので、愛妾たちの部屋へかような夜の道を教えた。このわしになったつもりで、女たちを自由にするがいい、不意を襲うのも結構、そそくさと済ませるのも結構、服を着たままやるのもまた結構、と言った。パトリシオ・アラゴネスもこれで情欲のはむらを鎮められると思ひ、泥沼めいた借りものの色事に文字どおり打ちこんだ。その欲情の妻まじいこと、あくまでも借りものだということをちよくちよく忘れた。のんびりとズボンの前をはだけ、どうでもいい詰まらぬことに手間をかけ、心根のひどく卑しい女たちが隠し持った寶石に、うっかり蹴つまずいた。彼女たちに深い吐息をつかせ、暗闇のなかでびっくりさせ、笑わせた。いやだ、年取ってから、なんだか、よけい助平になったみたいだわ、閣下、などとほざかせた。